

あおぞら

発行：愛知県被災者支援センター
住所：名古屋市中区三の丸 3-2-1
愛知県東大手庁舎 1階
TEL：052-954-6722
FAX：052-954-6993
開館：月～金 10～17時



『感謝の会』を開催して

11月9日(土)に飛島村にて、避難者の有志で『感謝の会』をひらきました。

5月から10月に飛島村で行われた、さつまいも植え付け、収穫体験に参加した避難者の中から、「何かお礼がしたい」という声があがり、『感謝の会』の企画に至りました。思いついたのが収穫の時期で、実施も年末直前の忙しいころだったので、初めは小規模なものでと考えていました。いざ声をかけてみると、さつまいもの企画に参加した支援者、避難者のほとんどの人が参加希望ということになり、総勢50名を超える企画になりました。

当日は、飛島村村長 久野 様も参加して下さい、伊勢湾台風での辛い被災体験を話されました。その時に支援を受けたことへの恩返しの気持ちが、東日本大震災の支援にとどまらず、海外に進出する日本企業や、海外で戦争の犠牲になった子ども達への支援にまで広がっているとのこと。私たちはその志の高さ、心の温かさに感動しました。

「被災者の皆さんの気持ちを共感することはできないけれど、寄り添うことはできる」

久野村長だけでなく、飛島村のボランティアの皆さんからも「寄り添う」気持ちを強く感じました。被災していないと共感できないという気持ちは、伊勢湾台風でご自身も被災者を体験されたから分かることだと思いました。体験は違うけれど、痛みを分かち合っている。その温かさを感じて胸が熱くなりました。

『感謝の会』では、子ども達の絵や折り紙で作ったお手紙の贈呈、歌のプレゼントをしました。参加者一人ひとりが一言ずつ話す時間もつくり、お互いの被災体験に涙する場面もありました。子ども達も歌ったり、一言話してくれました。

『感謝の会』なので避難者主導で…、とは思いましたが、会場の手配、企画など初めてのことばかりで、あたふたするばかり。結局は愛知県被災者支援センターの方々にも動いて頂きました。また、当日は「託児ボランティアはなしで」と言ったものの、結局は被災者支援センターの方や飛島村役場の方が、子ども達をみて下さいました。申し訳ないと思いつつも、サポートのお陰でいつも子育てに追われるママ達も、「感謝」の気持ちを伝えたり、動くことができました。

避難者仲間との事前打ち合わせは電話とメールだけでしたが、当日、皆が各自で機転をきかせて動いてくれて、とてもスムーズに進みました。震災では辛いことが多かったけれど、こうした仲間に出会えたことに感謝しました。

たくさんのサポートを頂いての『感謝の会』でしたが、自分達で動くことで自信がつき、仲間同士の団結力を感じられ、絆が強くなりました。飛島村の皆さん、被災者支援センターの皆さんとの絆も深まったのを感じました。

「サポートを受けながらも、小さな行動をつなげていくことで、自信を持って強く前に進む人が増えて欲しい」日頃、支援して下さっている皆さんから聞いてきた言葉が、『感謝の会』を通して私も体験し、実感できました。

飛島村では、学校で震災のことを取り上げ、被災者から体験を聞いたことをきっかけに、地元の小学生が避難者との交流に興味を持って参加しています。それぞれが無理なくできることで、支援者、避難者に関係なく「お互い様」につながっているなど感じます。一人ひとりの辛い体験を、未来の備えにつなげたいと、強く感じました。『感謝の会』を支えてくださった皆様に心から感謝しています。ありがとうございました。

(あおぞら編集委員 山本 由香)

「ふるさと交流会 in 東三河 B-1 グランプリ豊川」の報告

「B級ご当地グルメ」を利用し、地域活性化を目的とした町おこし活動である「B-1 グランプリ」の第8回大会が、11月9日（土）～10日（日）、愛知県豊川市で開催されました。全国のご当地グルメを食べることができる、楽しく珍しいイベントですので、愛知県に避難されている方々と支援者が一緒に食べ歩きをして交流を深めたいと願い、11月10日（日）、豊川市を会場に「ふるさと交流会 in 東三河 B-1 グランプリ豊川」を開きました。参加者は避難者8世帯18人、支援者36人、合計54人でした。

B-1 グランプリ初日は晴れて大盛況で大混雑でしたが、二日目の交流会当日は早朝から雨が降ったうえに、JR豊橋駅では飯田線豊橋駅～豊川駅間の切符を買うにも行列ができるほどの人出となり、地元豊橋の参加者の方でさえ豊川に来ることが大変、という悪条件が重なってしまいました。

しかし、JR豊川駅を10時に出発した避難者と、「愛知大学」「中部福祉専門学校」「愛知県立豊橋工業高校」の学生・生徒や個人ボランティ

アの方々が、相談しあいながら B-1 グランプリ会場内を一緒に回り、食べたい複数の B-1 グルメの屋台に、ボランティアが分かれて並んで購入して、予想以上に B-1 グルメを食べられたようですし、困難が多かったぶん交流も深めることができましたと思います。

13時30分から、豊川市「とよかわボランティア・市民活動センター」で、交流会を行いました。主催者挨拶のあと、参加者の自己紹介、フルート演奏、参加者どうしの交流を行いました。会場の設営もフルート演奏も、コープあいちの方々を中心に準備や運営をしていただき、助かりました。またこの9月に、豊橋市へ小さなお子さんと一緒に避難されたばかりの若いご夫婦を囲んだ情報交換会もでき、貴重な出会いの場にもなったかと思えます。

グループに分かれたフィールド活動であったことや、反省点も多々ありますが、参加車の皆さんがグルメを楽しみ、交流も深まっていただけでいたならば幸甚です。

（新聞グループ豊橋 山方 元）



第13回子育てつどいの広場

今回11月17日(日)の参加人数は、5世帯、大人6人、子ども5人の計11人でした。

今回私たちは、数カ月ぶりの参加でした。前は、子どもたちがプールで大はしゃぎしていたので、夏… 時が過ぎるのが早いと感じたのは、年のせいだけではないでしょう(としたい)。

毎回、会うたびに子どもたちの背が伸びていたり、話し方がしっかりしてきたりと、成長に気づかされます。日々の雑事に追われ、我が子の成長さえも見逃しがちですが、ここで少しほっとしながら子どもたちを眺めていると、それぞれの個性も豊かになってきていると感じます。初めて参加した時からすでに2年以上がたち、よちよち歩きだった子どもたちも元気いっぱい走り回るようになり、私も含めお母さんたちも最初のころより心が落ち着いてきたように思います。心が落ち着いたせいか、初めのうちは多くて残しがちだった昼食の、名古屋風お好み焼きも軽く完食、その後の大人だけのお茶タイムでのお菓子も持寄りが増えて、バラエティ豊かになってきました。できたてポップコーンを頬張りながらのおしゃべりは、どちらもやめられないとまらない勢いで、皆がリラックスしているのがわかります。

こんな状況も、毎回来て下さるボランティアの方たち、そして何より主催の「ボラみみより情報ステーション」のSさんのおかげと感謝しきりです。

子どもたちがそれぞれ楽しそうに遊ぶのを眺めながら、できたてポップコーンでおしゃべり

したい方、初めてでも楽しめるかと思います。

次回、また皆さんや新しい方とお会いできるのを楽しみにしております。

(柿の種 名古屋市南区 在住)

< お知らせ >

1) 次の子育てつどいの広場は第15回を1月19日に予定しています。

詳細は以前送付させていただきましたチラシをご覧ください。

申し込み優先ですが、若干の当日参加も可能ですので、直接お問い合わせください。

2) 「赤いランドセル(新品)」が、わずかあります。直接ご来所いただくか、送料着払いでお渡しできます。必要な方は早めにご連絡下さい。年齢制限はありません。

3) ボラみみより情報ステーションは、火曜・日曜・祝日をのぞく、月～土曜日の10時～16時に開設しています。冷暖房完備です。駐車場あり。通常、入会金が必要ですが、「あおぞら」をご持参いただければ、入会金不要です。1月末まで。

詳しくは、

ボラみみより情報ステーション

boramimist@yahoo.co.jp まで

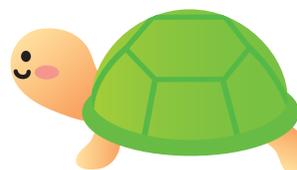
〒467-0842 名古屋市瑞穂区妙音通2-40

横山ビル1階

TEL : 080-4228-5356 (10時～15時)

FAX : 052-811-1812

<http://locoplac.jp/t000095629/>



『第16回お茶っこサロンなごや』に参考して

12月8日(日)のお茶っこサロン@熱田区に、6才の息子と2人で参加しました。

今回は秋の東北でおなじみの「芋煮会」でした。芋煮汁の調理からお手伝いさせていただけるとあって、大変楽しみにしておりました。当日集合時間より少し早めに到着したにもかかわらず、スタッフの皆さんに息子の相手をしていただき、安心して調理室に向かう事ができました。毎回子どもたちが喜ぶ企画を用意していただき、この日もボランティアの方々が珍しいおもちゃを用意して下さい、息子も大喜びでした。

調理室に入ると、段取りよく材料が用意されていました。里芋・さつま芋・大根・白菜・ゴボウ・ねぎ・豆腐に豚肉。エプロンをつけてスタッフの方たちと共に早速、調理開始です。2つの大きな、大きなお鍋に切った食材を分け入れて、火にかけました。1時間ほど煮込んでいる間、グツグツ、コトコトの音を聞きながら、東北出身の方々から芋煮について色々なお話を聞くことができました。芋煮会とは頻繁に行われるイベントで、地域や仲間との親睦を深めるものである事や、地域により、家庭により味付けが違う事、山形県では牛肉を入れるとか、東北地方でも芋煮をしない県もある事などなど、愛知県出身の私にとっては、目からうろこの興味深いお話ばかり、そんな楽しいお話を聞いているうちに、野菜もすっかり煮え、最後は味付けです。おだし、味噌や醤油を入れる

そうです。味見をしますと、いろいろな野菜の風味がまろやかな甘みになってなんともいいお味です。「まだ味付け薄いかなー、もうちょっとお味噌足そうかー」と言いながら出来上がり。

会場に大なべを運んで、皆さんでいただきました。大勢の皆さんとアツアツの芋煮汁をいただくと、心もほっこりして、おいしさ倍増になりました。

私は福島市から母子避難してきておりますが、震災の3か月前に主人の仕事の都合で福島市に転勤になりまして、短い期間しか福島市に住んでおりませんでしたので、もし原発事故がなければ、避難する事もなかったわけだし、芋煮を福島で味わう事ができていたのかなあと、ふと考えました。でも、今回企画していただいて、ここ名古屋で皆さんと一緒に芋煮会を体験させてもらえた事で、心温まる交流をさせていただけて感謝いたします。ありがとうございました。

(水谷 峰子 名古屋市名東区 在住)

※今後の『お茶っこサロンなごや』の予定です。

毎回楽しい企画があります。ぜひご参加下さい。

☆12月15日 天白区 在宅サービスセンター

☆1月19日 南区 日本ガイシフォーラム和室

☆2月16日 守山区 アサヒビール名古屋工場



ふるさと芋煮会の報告

ご参加の皆様、大変お疲れさまでした。

晴天にめぐまれた12月1日(日)、熱田区にある「発達センターあつた」の敷地内で、盛大に芋煮会が行われました。

名古屋キリスト教社会館が2011年8月に交流会にかかわり始めて2年半がたち、今回で早くも10回目となるそうです。私自身も社会館の職員として何回か参加させていただいていますが、冬のイベントでは昨年が続いて「もちつき」を担当いたしました。

当事者グループの「めぐりあいの会」が主催という形になり、代表の江本さん、副代表の高橋さんの元気な発声で始まる雰囲気は定着してきました。

会場を見渡すと、まずメインの「芋煮」。大鍋で煮込まれ、みそ味でとん汁風がからだを温めます。そして、つどいの中ではすっかり定番となった「浪江やきそば」。去る11月8日、9日に第8回目にして初めて愛知県で実施された「B-1グランプリ」in豊川にて、青森県の「十和田バラ焼き」、千葉県の「勝浦タンメン」を抑えて「ゴールドグランプリ」に輝いた、あの「浪江やきそば」です。もちろん「P亭らーめん」もすっかり定番となりました。何杯でも食べたくなるうまさです。「焼き鳥」や「綿菓子」「玉せん」もいつもの顔になりました。日用品バザーも雰囲気を盛り上げます。室内では、これも恒例となった、避難者の方でプロが施す「マッサージ」、あつという間に予約が埋まってしまいました。

舞台では、参加アーティスト(?)は、回を追うほどに層が厚くなっているようですね。

ここで、忘れてはならないのが「餅つき」コーナー。実は、つい1週間前の社会館バザーでも杵つきもちの販売を行ったばかりでした。でも、



もう欠かせないコーナーになっているでしょう。きなこ、大根おろしもさることながら、つきたての餅を「芋煮」に入れて食べるとおいしいのですよ。ぜひ来年はお試してください。

と、大人も子どもも楽しんだ「芋煮会」は和やかに終わりました。

ところで「南相馬連合」のファンとして、Tシャツも購入して「原発反対」とこぶしを振り上げておりましたが、時が経つとともにマスコミの取り扱い方が薄くなっているのを感じるこの頃です。単に壊れた建物や街を新しいものにするだけでなく、見た目は壊れていないのに住むことのできない放射能汚染地域に、再び戻れるためには何をすればいいのか。責任の所在さえ明らかになっていない。そもそも事故だけの責任がどうこう言う前に、人間にコントロールできない危険なものをくらしの場のそばに建てたこと、原子力政策そのものについて、根本的に問題を明らかにする必要があるのではないのでしょうか。

実際、なにかができるわけではないのですが、楽しい交流の場を持ちながら、少しでも現実の問題として考えるきっかけとして、今後も続けてくことの意味は大きいと思います。

(名古屋キリスト教社会館 職員 加藤 淳)



ひとり一人がこれからできること

3.11 から 2 年半が過ぎました。被災地の報道も日が経つにつれ減少しています。福島の問題も日々の生活に追われ、目に見えない放射能についての不安は忘れ去られていますし、忘れないと生活できない人々もいます。このことは、福島に限らず、愛知でも同様です。

震災直後、私は福島から少しでも離れた方が身体には良いと判断し、福島子ども達を積極的に愛知に招待する「保養活動」を始めました。たくさんの方々のお力添えで、これまでに 4 回 126 名の親子を招待。また、テニスやバレーボールのスポーツ交流を目的に小中学生 45 名を、高校生インターアクト委員会（ロータリークラブが支援）の交流を目的に 11 名を、岡崎に招くことができました。しかし、回数を重ねる度に、また福島に戻りお母さん達とおしゃべりをする度に、支援する側と支援される側といった観点で保養を続けることには、限界があると感じるようになりました。このことは、岡崎市内に避難されている被災者を訪問する時にも感じていたことでした。

2012 年夏の保養にボランティアとして参加したお母さんが、「福島のお母さんは謙虚でびっくりしました」と感想をうかがいました。そして、今年、夏の保養にゲストとして参加した、南相馬より流山市に避難されているお母さんより、「おいでんプロジェクトのスタッフママは、とても謙虚で感動しました」と帰着後、連絡がありました。平常心ではありえないような要望、

不満を言い続けていたお母さんの言葉でした。

被災者の意識や、被災地での様子が変わっていることに気づかず、同じ視点で支援続けることは本当の支援ではなく、一方的なおしつけにもなりますし、被災者の不満を受け入れ続けることで被災者自身の解決にはつながらず、支援する側が気付く時が来ました。

震災直後より、空きマンションをショートステイ希望の友人知人に提供するために、準備をしました。まず細やかな希望を受け入れ、叶えることで安心を覚えて欲しいと願っていました。なかなか利用者がありませんでしたが、今年 11 月に入り、愛知県被災者支援センターより移住希望者のために宿泊場所を提供してほしいと、連絡がありました。その方は、名古屋近郊に移住を希望されているとうかがい、名古屋在住で以前より被災地支援に手を挙げていただいている方に連絡をし、空きマンションをご提供いただくことになりました。また高校 2 年生のお嬢さんの転校相談には、同じ状況でお嬢さんの転校経験のある避難者の方にお声がけし、快くお引き受けいただくことになりました。

一人ひとりが温かく、一人の被災者と接することで、愛知から遠く離れた被災地にも温かい波となって伝わるように願いながら、今、自分のまわりにいる人に温かく接したいと、心に決めました。

（福島のみんなあそびにおいでんプロジェクト
小松恵利子）



“私たちの抱える問題”と支援を考える — 当事者と支援者で話し合いませんか —

リレートーク報告

日時：2013年9月26日（木） 10:30～16:00

会場：愛知県社会福祉会館3階 研修室

午前中は避難者6名によるリレートークが行われ、午後は避難者と支援者、学生、専門家を含めた9つのグループがそれぞれ問題と支援について話し合いました。

※ 午後のグループワークについては、あおぞら 第39号（平成25年10月25日発行）参照

リレートーク

（愛知県に避難した私の経験・これからへの期待、当事者のこれまでの体験やつながりを通しての思いを語る。）

- 医療や健康の相談
- 子育てと食生活の安心
- 生活の自立をめざす
- 避難生活と損害賠償
- 愛知での地元のつながり
- 外国の地での災害避難

主催者 あいさつ

東日本大震災から2年経ちましたが、復興として大規模工事や整備が進む地域もある反面、新たなコミュニティの形成に悩み、社会福祉サービスが受けられないなど様々な課題が残され、ボランティアで解決出来ることが少なくなってきました。

被害を受けた方々の課題が個別化、深刻化していることが心配です。私たち支援者が出来ることは、被害に遭われた方々の声をお聴きして、

しかるべきところへ届ける事です。何年かかるかわかりませんが、繰り返し訴え続けていかなければなりません。「がんばって」では済まされません。風化させることなく、無関心になることなく事実をしっかりと知ることが大事です。

今日の忌憚のない声に耳を傾け、意見交換しましょう。

（愛知県被災者支援センター
センター長 栗田 暢之）



医療と健康調査について

2011年3月11日午後2時46分、あの日は自宅で仕事をしていました。

福島で生まれ育った私は、小さい頃から教科書でも「安全でクリーンなエネルギー」として、原発の良いところしか習ってきませんでした。でも原発事故は起きました。不安ながら、「国が避難を指示する半径5Km圏内ではないし、30Kmの範囲内なら大丈夫」だと信じていました。しかし、自分が住んでいる地域、子どもが通っている学校の放射線量が高いという事実を、突然新聞で知らされたのです。今まで「普通の生活を送っても大丈夫だ」と言っていた行政やメディアに対して、強い恐怖と不信を感じました。それからは、より子どもたちを被ばくさせないようにと学校への送迎を続け、子どもにだけは家で作った野菜を避け、他県産の野菜や米の食事を作りました。

6月に国と県は住宅ごとの放射線量の再調査を実施し、「特定避難勧奨地点」指定をしました。我が子が通っていた小学校は全校生徒が57人で、勧奨地点に指定された子どもは20人、私の家は勧奨地点に指定されていませんでした。

こんな小さな小学校で「国から守られる子どもと守られない子どもに分けられるってどういうことなんだろう?」「子どもは皆平等に健康に生きる権利があるのではないか!？」と強く思うようになりました。やっと支援の手が届くと思っていたのに、選ばれた人だけが支援され、本当にショックでした。

要望してやっと開かれた説明会で、「年間20ミリシーベルト以下であれば、普通に生活しても大丈夫」というので、「勧奨地点に指定されず、万が一将来子どもたちが病気になった場合、国は責任をとってくれるのか?」と質問しました。すると「因果関係が証明できなければ、最後は司法の場で」と言われ、とてもショックでした。

その頃、地域の有志で「勧奨地点ではなく地域にしてほしい」と署名を集めて要望書を出す活動をしたり、子どもの疎開で愛知県の団体のサマーキャンプに参加させました。寂しさより、

子どもたちが被ばくしない安心感が勝っていました。

放射能が及ぼす健康被害が不安で、伊達市でも説明会に何度も参加しましたが、「タバコを吸うほうが発ガン率が高い」など、説明に納得したことはありません。もっと中立な立場で放射能の影響や、被ばくしてしまった私たちが今後どのようなことに気をつけて生きていけば良いか、教えてほしいと願っています。

原発事故から1年間、子どもを守るため無我夢中で、国県市やテレビ新聞などに訴え続けてきました。結局何も変わらず、子どもは被ばくするばかり。自主避難を決めて愛知へ来ました。

愛知県へ避難してきた最初の1年は、新しい環境に慣れるのに必死でした。故郷に残してきた家族や友達を思い、私だけ避難してきて良かったのか?と自問自答する日々でした。でも、だんだん「行動したことは間違いではない」と思えるようになりました。

県外に避難してきて困っているのが、内部被ばく検査が福島に帰らないと受けられないことです。県外でも受けられる県民健康管理調査は手続きに時間がかかるうえ、指定病院は平日の午前中のみが多く、学校を休ませなければなりません。問診、診察、身長、体重、血圧、血液検査という内容なので、近くの小児科で受けられるとうれしいです。

(秋葉 知子 大府市 在住)

子育て世代が求める食の安全のために

愛知県ではどのくらいの人不安を感じているのかわからず、周りに相談しにくいです。周囲の方の気遣いに、気持ちが落ち着く時もあります。でも、また不安になります。自分の子だけ元気ならいいのか?と自問し、日本中の子どもも内部被ばくから守らなければ、と思うようになりました。

放射性物質のことが気にかかり、保育園の給食食材に関して、市長に要望を伝えに行ったこともあります。断乳を進められ、魚も買うのに

慎重になり、家族からは「気にしすぎ」といわれ、おびえる自分のことを一種の病気かと疑うこともありました。

当時、政府の素早く正確な情報がないまま、「自分で決断。自分で移動。自分で求職・就労。自分の子は自分で守るしかない」事を感じ、政府に対して不信感がわいてきました。国に見捨てられたんだな… と。

子ども達のために、よい食事と検査を続けようと決めました。

名古屋市とは違い、尾張旭市では制度も費用の面も、国や県が動かなければ難しそうです。

『子どもを守る』という国や地方の決意と、全国等しくより低い数値での給食食材使用前検査の徹底が必要です。親がしっかり働くには、子どもたちを安心して預けられる保育園が必要です。「子どもたちには安心して暮らせる社会を準備してあげたい」、この願いが実現するとういいます。空も海もつながっているのですから。
(匿名)

生活の自立をめざして

私の職業は看護師です。平成 23 年夏休みに保養キャンプに参加して、平成 24 年 3 月に大府市に避難してきました。福島に住む母親と職場の協力で、今も正社員として働いています。

避難したくても様々な理由から避難できない人から、「看護師だからどこに行っても仕事があっというね」といわれますが、そう言われるのは嫌です。私は看護師じゃなくても、子どもの健康のために避難します。

避難してきて生活にも慣れましたが、被災者だといつまでも受け身でいては、自分自身が前向きに生活できないと思いました。

被災地で生活するには、衣、食、住、コミュニティーなどに対して、多くの配慮が必要です。そんな環境の中で、声をあげて伝えることは、精神的にも肉体的にも負担となります。健康に対して安心を感じる生活を取り戻しつつある今、もう頑張りたくない、そっと生活していた

い、と思うこともあります。

「子ども・被災者支援法」について検討されていますが、自分たちの法律にするために、声を伝えたり動いたりしたら支援法ができました。その反対で、声が伝わらないことも多くありました。震災を通して、政治や様々なことを考えさせられたし、経験しました。何のために避難してきたのか、子どもに対する責任を果たすために、何からどうしていったらいいのか？ これからも考え、今以上に未来へ向けてできることから始めたいと思います。

(太田 純子 大府市 在住)

ADR(裁判外紛争解決手続)について

私が伝えたい事

3月11日に県外に住んでおり、夫の仕事先より郡山市への転勤辞令があり、5月から郡山市へと引っ越しをしました。郡山市では、制限された生活を送りました。

そんな中、同市は精神的損害賠償の対象地域でした。私達は、事故当時福島にいなかったもので、仕方が無いと諦めていました。しかし、義母が『孫のために少しでも何かしてあげたい』と言う気持ちから、紛争センターを調べてくれて、私達の手元に書類が届きました。郡山市に住んでいる時に東電に1度請求しましたが、結果はダメでした。

しかし、今年の2月(愛知県在住)に紛争センターから、「もう一度やってみないか」と連絡があり、書類作りをしました。

提出した書類は母子手帳の写し、在職証明書、住民票、日記、避難前と避難後の夫の名刺、子どもの診察券、そして領収書です。ADRを通し、東電より和解契約書が届きました。領収書は認められたものと、認められなかったものがありました。

書類作成は限られた時間で、子どもが寝た後、家事をすませ、プリンターでの作業でした。コピー枚数も100枚以上、領収書を探したり、行動を思い出したり、たいへんでした。郵送した

り電話でのやりとりの末、提出し終えたときは達成感でいっぱいでした。東電との和解が決まったときは、泣きました。

郡山市に住んでいた1家族がこんな生活をし、こんな苦勞をして生きてきたことが、国と東電に知ってもらえたら良いな、という思いです。
(匿名)

避難先での人とのつながり

2011年3月15日に埼玉県から実家のある愛知県に、母子避難しました。避難後は同じ立場の人と知り合うきっかけが無く、複雑な思いを話せず精神的に不安定になりました。

震災から1年が経ち、新しい生活にも少しずつ慣れてきた頃、「同じ立場の人と会って話したい」と強く思うようになり、インターネットで投稿をして、関東からの避難者の方と知り合い、『被災者登録』のことを教えてもらいました。登録後はたくさんの情報を手にでき、たくさんの避難者の方々と出会えました。ずっと溜めてきた思いを話せて、しかも共感してもらって、とても気持ちがラクになりました。もっと早く知っていたらこんなに苦しまずにすんだのに…と思いました。

イベントに参加するうち、他の避難者の方を支援していきたいと思うようになり、『災害ボランティアネットワーク』に入りました。震災から2年経った今も自主避難してきてことを堂々と言いにくい雰囲気があります。避難後の孤立を防ぎ自立を促すためにも、避難者の方々と愛知

の方々をつなぎ、被災していない多くの人に、自分事として危機感を持って備えてもらう。それが支えて頂いたみなさんへの恩返しだと思って、これからも避難者仲間と一緒に、愛知でのつながりを広げていこうと思います。

(山本 由香 名古屋市中川区 在住)

外国人として避難して

2011年3月11日、栃木県で震災にあいました。ガソリンスタンドでは給油できず、コンビニでは食べ物も無く、朝まで待って、ようやく給油。自宅まで50キロの帰り道、道路も壊れ、大渋滞で1日かかりました。自宅はぐちゃぐちゃで集会所に避難しました。会社からは仕事はなく、自宅待機と言われました。中国大使館からすぐに帰れるということでしたが、日本に残りました。仕事を辞めて罹災証明をもらい、娘のいる名古屋へ引っ越ししました。

地震で何もかもなくなったのですが、支援センター、ボランティアセンターなごや、日本赤十字社から電気製品や生活に必要な物などしてもらいました。飛島村からはお米ももらいました。ありがとうございます。

自分は健康で働きたいが、面接では外国人だから、日本語がうまくないからと信用してくれません。今は仕事がありません。

10年以上全国を走っている経験をいかして大型の運転手をやりたいです。

(工藤 福一 名古屋市港区 在住)

